
あめおんな番外編：安芸の失恋

黒作

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

あめおんな番外編：安芸の失恋

【Nコード】

N5635Y

【作者名】

黒作

【あらすじ】

安芸の失恋の話です。

あたしの彼氏をとった女の人と、かち合ってしまった。

社内の自販機前。火花が飛び散る、って？ 泥沼、修羅場？

自分で驚いたことに、胸にこみ上げたのは確かに憎いって感情だった。

その人も驚いた顔をしていたけど、すぐに目礼だけされた。あたしはなにも返さなかった。頭が真っ白だった。

こつちを気にした風にしながら、周りをちらちら見て、その人はもう一度あたしに頭を下げた。逃げられる。追いかけなきゃ、って思った。

＊＊

「安芸はなにも悪くないよ」

「それじゃわからないよ、久坂」

初めて別れたいって言われたとき、寝耳に水だった。だって久坂はずっといつも通りで、やさしくて、楽しそうに笑ってて、やわらかくあたしを守ってくれていた。いかにも頼もしいってわけじゃない久坂に守られてるのって、あたしが特別なんだって思えて、本当に大好きだった。

わからないよ。どうして？ あたし、なにが悪かった？ なにかいけないことしたんだよね？

泣いて泣いて、子供みたいに駄々をこねて。やだよ、突然過ぎるよ。ひどいよ。

久坂は言ってくれた。そうだね。ごめん。確かに急過ぎたよな。

……少し、時間を置こうか。

別れ話が撤回されたわけじゃないのに、それでもあたしは嬉しかった。助かった、って思った。結局そんなことを、何度も何度も繰り返した。二年くらい。

あたしは久坂の携帯を盗み見た。アドレスは男も女もいっぱい。

あたしの知ってる人も、知らないひといっぱい。履歴もメールも怪しいところなんてなかった。消しているんだろうか。

苦しくなって涙が出た。泣いていたら久坂が戻って来ていた。久坂の携帯は握り締めたままだった。久坂は怒りもしなかった。

浮気してるほうがよかったかな。やさしい声だった。首を振った。あたしは泣き続けたけど、久坂は隣にいただけで、慰めてはくれなかった。

納得するのを待っているの？

久坂に別れ話を切り出されたことを、あたしは誰にも相談しなかった。できるわけがない。そんな、恥ずかしいこと。

あたしは、ちょっとおかしくなったのかもしれない。

「お母さん、家って借りると結構高いんだねー」

ある日曜日。ソファで新聞を読んでいるお父さんに聞こえるように、夕飯を作っているお母さんに言った。

「ええ、どうしたのいきなり。……あら？」

あたしとそっくりらしいお母さんのまんまるい目が、まんまるく見開かれる。年をとっても綺麗な自慢のお母さん。あたしもこんな風になりたい。

「あらやだ、そうなの、陽菜子？」

あたしは笑うだけでそれには答えない。

「久坂に貸してるマンション、あたしも住んじやまずいんだっけ？」

「ご夫婦で住まれてる方もいらっしゃるけど、でも2DKじゃ子供がねえ」

「安芸家の娘が転がりこむような真似はだめだぞ、陽菜子」

「あなた」

お父さんが新聞を見たまま言う。あたしはしゅん、と肩を落とす。お父さんがちらつとこつちを盗み見られるように、目線を落とす。

「……新居を用意して、挙式をする。世間様に流行りもあるだろうが、順序は大切にしないさい。それより、どうしておまえは軽々しくそんな話をする。またおまえだけ舞い上がっているんじゃないだろうな」

「軽々しくって……ちょっと、聞いてみただけじゃない」

正直、すぐく動揺してしまって、口をとがらせてもこもこと答えてしまう。お父さん、気づいてるの？

「いいか、おまえにはわからないかもしれないが、こういうことは久坂君から話があるのが筋だろう。おまえがなんでもかんでも口を利いていたんじゃ、彼の沽券に関わる。彼を立てるということを考えなさい」

「あ……なんだ」

「なんだとはなんだ？」

「ううん、すぐく納得しただけ！でもお父さん、あのね」

あたしは、醜い人間だ。

「そのね……久坂、ちょっと気にしてるみたいだからさ。久坂のおうちって、その、ばらばらじゃない。久坂がこんなこと言ったんじゃないからね、間違えないでよね。でも、うちがきちんとしてるから、申し訳ないって思ってるみたいで」

とてもとても、醜い人間だ。

お父さんとお母さんが顔を見合わせる。ふむ、とお父さんがあごをしごく。

お父さんが久坂君を家に呼びなさい、と言った。あたしはお父さんが呼んでるから、と久坂を夕食に招待した。

お父さんは改めてなにかを確かめたりはせず、久坂の借りている

マンションの話をした。あれは独身寮に近いコンセプトで作られていて、子供にはもう少しふさわしい環境があるねとか。そのあと、順序は大切だが、形式を整えることをこだわるつもりはないだとか、今後も応援していくだとか、自分達は老後をこう考えている、とか。久坂は戸惑いつつ、とりあえず返事をしていた。隣に座るあたしを見たけど、あたしはお母さんに料理の話をして、そっちを見なかった。

久坂はもともと、大学教授である叔父さんに師事する学生だった。で、この大学っていうのが、うちの会社と密接な関わりを持っていて。人材育成ということで、その分野を研究する若い人を支援しているんだよね。久坂はその支援対象だった。詳しく聞いたことないんだけど、ご両親がお金出してくれなかったんじゃないかなって思ってる。

あたしは叔父さんと仲がよくて、それに大学に遊びに行くのも好きだったから、小さい頃からちよくちよく顔を出していた。それで久坂と知り合った。

叔父さんの評価を持って、お父さんの面接を受けて、久坂は会社に入った。

久坂が指輪を買いに行こうか、と言ってくれた。

だけど、結局久坂は、婚約を破談にした。お父さんとお母さんと、あたしの前で、この話はなかったことにしてくださいと頭を下げた。お父さんは、どうしてだね、と尋ねた。久坂は、他に好きな女性がいいます、と答えた。

ではずっと、陽菜子の他にその人と？ いいえ、お付き合いは誓って陽菜子さんとだけでした。

じゃあどうして、陽菜子と婚約したんだね。そうよ、どうしても、晴臣さんの、

久坂はあとは、申し訳ありません、としか言わなかった。

あたしは近くにあったティッシュ箱を投げつけた。泣きながら、
ばか、と怒鳴った。

言えばいいじゃない。あたしがかわいそうだったからだ、って。
あたしが勝手に外堀を埋めちゃったせいで、断ったらお父さんとあ
たしに恥をかかせるからだって。

あたしはそんなこと言っただけでいいんだから。もっとお父さんに
怒られればいい。

帰りなさい、とお父さんが冷たく厳しい声音で言った。どんな理
由であれ、こんなに簡単に覆していい決断ではなかった。

久坂はもう一度、申し訳ありませんでしたと繰り返して、家を出
て行った。

泣き崩れるあたしに、かわいそうに陽菜子、かわいそうに、って
お母さんが抱きしめてくれる。

そうだね。あたしはかわいそうだ。久坂に好きでいてもらえなか
ったあたしは、なんてかわいそうな女なんだろう。

久坂の相手は、全然わからなかった。恥をしのんで友達に聞いて
みたりもしたのに、みんな知らないって首を傾げる。断る口実だっ
たの？ それとも、あたしがかわいそうだからみんな黙っているの
？ 久坂に口止めされている？

でも、秋も終わる頃、屋上で久坂が女の人と一緒にいるところを
見た。

「そら、それが相手やろ」

「なんで言い切れるの？ 特別な話してたわけでもなかったよ。久
坂はパン食べながらだったし」

「盗み聞きしたんか」

「ちよつと聞こえただけ、ちよつと！」

……聞こえる位置にまでは行っただけ。

「それに、すぐおとなしそうな人だったし……」

「ふうん、ブスやったんか」

「そんなこと言っていないでしょ!? ただ、人の……とるような、人には見えないって言いたかったの!」

「そやなあ、陽菜ちゃんの男とるような女、派手で美人でえろくて久坂くんたぶらかす悪い女じゃなきゃあかんよなあ」

「どういう意味? どうして数ちゃんってそう意地悪なの?」

「意地悪言われてんのわかるなら、いつまでもそんな相手にぶつぶつ言わなええやろ。もう何ヶ月よ、かなんわ」

心底うんざりしたふうに、数ちゃんは肩をすくめる。

「だって、数ちゃんは久坂と大学からずっと同じ研究室だったじゃない……」

従兄弟の数ちゃん。教授の叔父さんの息子で、久坂より年上なんだけど、浪人してて同期。入社後からずっと関西支社にいて、つい最近こっちに帰ってきた。エセ関西弁はやめろって叔父さんは言ってるらしいけど、本人は気に入ってるのか一向にやめる気配はない。あたしから見るとエセなのかわからないくらいハマっているんだけど。まあそんなことはいい。

「ねえ、どうしてその人だって言い切れるの。面倒くさくて適当に言ってるんじゃないよね、数ちゃん」

「うつとおし! どっちだってどうだっていいやろ。それで久坂君の気持ちに陽菜ちゃんに戻るわけやない」

「……そうかもしれないけど、だって」

きつついことをズケズケ言う。数ちゃんは容赦のない人だ。でも、本人全然女の子に縁がないくせに、妙に人の心理に詳しかったりするから、どうしても話を聞きたくなくなってしまふ。

「陽菜ちゃんにしてみりゃ、久坂君にお相手がおらんほうがあえんやろな。自分に悪いとこがあって久坂君が離れただけなら、自分がそこ直せばまた戻ってきてくれるかもしれん、って思えるから?」

……図星だ。

「だって久坂が他に好きな人いたなんて、信じられない。そんなそぶり、本当に全然なかったんだよ」

ふう、数ちゃんが深く息を吐く。

「社内と一緒にごはん食べてたんやろ。それなら、僕はそんひとが久坂君のお相手やと思う」

「食べてたのは久坂だけだつてば。久坂、いつだつてばくばくになにか食べてるじゃない」

「久坂君、隙のない人やからなあ」

「どういうこと？」

隙がないなんて、久坂が言われるような言葉にしては意外すぎて耳を疑う。

「誰も久坂君の相手らしい人知らんかったつてことは、久坂君の周りにそれらしい女がおらんかったつてことやろ。気いつけてたんと違うの。関係ない女とふたりで話したりして怪しまれたりしたらそいつにも迷惑かかるし」

いつも冷たい数ちゃんの目に、ちょっとだけ哀れみがこもった気がした。

「つまり一緒にいた人つてのは、久坂君が迷惑をかけてもかまわんと思てる、一蓮托生の相手つてことや」

心臓が痛む。刺されたみたいに。

「どれだけ経ったか忘れたけど、そろそろの頃合と思たんかね。こっただけ引きずってるの陽菜ちゃんだけやし。こないだは伯父さんと話してるところも見たわ」

「お父さんが？」

数ちゃんが素早く眉をひそめる。

「僕、陽菜ちゃんのそういうとこ嫌いや。だから久坂君びいきになる」

「え」

「忠人伯父さんのことあてにしてたんやろ。今、頼りがなくなつた、つて顔したで」

「そんなこと」

「ある。だいたい陽菜ちゃんわかってへん。久坂君はな、僕の父さ

んのこと慕ってたんよ。忠人伯父さんのことも」

突然数ちゃんがなにに怒り出したのかわからなくて、からだを小さくしてしまう。

「僕の父さんにも久坂君のこと悪う言うたやろ」

「い、言つてない」

「そやな、確かに言つてない。陽菜ちゃんは事情を話すとき、久坂君がずっと別れ話してたつて言わんかっただけや」

「違つよ、言えなかったただだよ！ 久坂にずっと、わ、別れようつて言われたなんて、言えないよ……」

自分で言つた言葉が痛くて、涙があふれてしまう。でも数ちゃんはさらに冷たくて。

「それ、ほんまで言うとするん？ だしたら疑うわ。話の大事なところ、自分の気持ち守るために言わんこと正当化して。計算なら恐れいる。両方だから性質が悪いんかね？ なあ、ほんまは久坂君が陽菜ちゃんに結婚の意志をほめかしてたつてのも嘘なんやろ」

からだが強張ってはねたのはわずかだったと思うのに、数ちゃんは見逃してはくれない。

「やつぱりね。久坂君がそない迂闊なことするわけない」

吐き捨てるように言われる。恥ずかしくて消えてしまいたい。

「とどめ、刺したるよ」

数ちゃんは、顔を覆って泣いているあたしにさらに続ける。

「これは僕が勝手な想像やけどな。久坂君は絶対にほんまのとこ誰にも言わんやろうから。久坂君は、陽菜ちゃんと結婚するつもりやつたと思う。尊敬する先生の、僕の父さんやけど、その姪っ子に手出すなんて時点でそれなりの覚悟してたと思うし、もちろんそれだけ陽菜ちゃんのこと好きで決めたんやと思うよ。考えなく動くわけない。久坂君は頼れる親も兄弟もおらんから、大学来た時からもうやたらにしっかりとした子やつた」

しっかりとしてる。お父さんも久坂をそう言つてた。そうかなあ、のほほんとしすぎてない？ なんて照れ隠しもあつて言つたのに、

おまえはわかってないなって苦笑された。

「もしなんか見込み違いがあつて、まああるのが普通やろうけど、ちよつと陽菜ちゃんを好きじゃなくなつたとしても割り切つて結婚したと思う」

「結婚つて、そんなことできるの？ あたしを好きじゃなくても」

「結婚を恋愛の延長じゃなく、毎日の生活として考えたらな。陽菜ちゃんがええ子なのは間違いないし、その家族にも受け入れられていて、仕事も安定、尊敬する先生も親戚になるんや。おだやかな生活が見えるやろ。誰もが恋愛を求めて結婚するわけやないで」

それはわからない。あたしには、わからなかった。

「でも、久坂君はその人を選んだ。結構な土壇場で」

涙も、声も、今は止まっている。数ちゃんの言葉だけが今のあたしの世界にある。

「それだけその人が好きだったのか。それともそれだけ陽菜ちゃんのこと、耐えられん思つたのか。なあ陽菜ちゃん、どっちがいい」
どっちがいい？

「久坂君の心変わりがわからなかった？ そもそもその時点で終わつとるわ。久坂君のことなんか、全然わかつてへん。陽菜ちゃんに久坂君は荷が勝ちすぎてるんよ」

「やだよ」

涙が、また動き始める。嗚咽が漏れる。苦しい。

「久坂に振られるの、やだよお」

数ちゃんがまたため息を吐く。

「……なんや、わかってんのやな。そうやな、ほんまは情の深い、頭のええ子やもんな。そんだけ好きだった、か」

数ちゃんの手が頭をなでてる。久坂の手じゃない。

「もーええわ。納得するまで暴れとつたら。でもな、周りの信用失くすようなことはしたらあかん。久坂君、これから色々ツケ払うだろうけど、それでもこれまで築いてきたのがあるし、いずれは取り返すやろ。そういうふうに立ち回って生きてる人や。自分の選んだ

人、守るためにもな。嘘ついて伯父さんやうちの父さんに見抜かれてる内は、久坂君には敵われへんよ」

悔しい。久坂なんて不幸になっちゃえばいいのに。あの人と別れちゃって、あたしのことを後悔すればいいのに。

でも、あたしは敵わないらしい。久坂は不幸にはなってくれないらしい。

少し安心した。そう思えた自分にも、少し安心した。

「うわあああん」

「あー、でも成人女子の泣き声はうっさいな！ 手加減し！」

＊＊

「待って！」

あの人に声をかける。折原さん。でも彼女はまだ、足を完全に止めない。まだ逃げるつもりなの？

「場所を変えましょう」

「人のいるところじゃ恥ずかしいんですか。自分が後ろめたいことしてるって自覚があるから？」

こんなひどいことを言えたのは、彼女の持っているコーヒーが2本だったから。久坂の好きな。

「会社の人間だからです。屋上でいいですか」

いきなり社会人ぶられて、頭にもっと血がのぼりかける。でも、屋上で聞いてあたしはしり込みした。久坂が近いのは、いや。

「資料室は？ 鍵を預かっていますから」

なにも言っていないのに、違う場所を提示される。悔しいって思うことも悔しい。でも、なにも考えていなかったから、そこでいいとうなずいた。

資料室に入るなり、彼女にもわかるようにあからさまに値踏みす

る。スタイルは特別いいってわけじゃない。肩は細いけど、お尻は結構大きいし。髪も綺麗に結ってるけど、つややかって言うほどでもない。声は暗そう。顔は特徴のない感じで、少なくとも目は大きくない。

というか、思い出した。あたし、これでもひとはよく覚える方でこの人、会ったことある。

何年前だかの会社のお花見に来てた。小雨なのに無理に開いたお花見。桜が見える駐車場を借りて、ブルーシートを敷いて。ずっとひとりですみに座って、飲むでもない紙コップのお酒を手には遠い桜を見ていた。普段のあたしはそういう人がすごく気になるから、輪に入れてあげたくて声をかけるんだけど、その時は他につかまってい出来なかった。気にしていたら久坂が彼女に声をかけて。

すごく嬉しかった。あたしの久坂は、やさしい人なんだよって。誇らしかった。

ばかだ。

情けないことに、涙がこみあげてしまった。そのまま泣き出したあたしを、折原さんはただ黙って見ていた。

言ってやりたいことはたくさんあったと思う。

だけど、いざ目の前にするとなにも出てこない。

どれくらい、黙りこくってたんだろう。チャイムが鳴る。始まつたばかりだった昼休みが終わる。でも、あたしは動けないままで、折原さんも動かなかった。

「……行かなくて、いいんですか。会社の人間なんでしょ」

正面から彼女を見ることはできなかった。すねた子供みたいな自分の言い草にうんざりもする。自分がこんなことを言う日が来るなんて思わなかった。でも、コントロールできない。久坂に初めて振られた日からずっと。

盗み見る彼女は、ためらっているのか、言葉を探しているのか。ゆっくり口を開いた。

「でも、あなたのお話は終わっていないでしょう」

「関係ないじゃないですか。会社の人間だって言ったじゃないですか」

なんでもいいから、攻撃したかった。この気持ちをぶつけてしまいたい。

「そうですね。……ただ、今聞いておかないと、後悔すると思うので。そういうことって、ありません？ 時間を改めたらいけないことって、あると思いませんか」

暗いって言った声。静かに、ゆっくりと伝わってくる。あたしの話を聞きたいと、この人は言っている。そんなのはずるい。

話を聞こうとする人を憎み続けるのは、憎むのに慣れていないあたしには難しいのに。

「ずるい」

「……そうですか」

「ずるいです。折原さんは、ずるい」

また涙がこみ上げる。目をおさえつける。

久坂に好かれて。憎み続けるには、難しい人柄で。

だってあたし、好きなんだもん。人の話を聞く人、好き。いつも自分でそう言ってた。久坂みたいな人が大好き。おだやかで、簡単に怒ったりしなくて。あたしのわがままも、かんしゃくも、ゆったり受け止めてくれる。

「どうして、あたしじゃだめだったんですか。久坂は教えてくれないの。謝るばかりで」

折原さんがまばたきをする。

「あなたに聞くのがおかしいのなんてわかってる。だけど、それを知りたくて」

どうしても、知りたくて。

「久坂さんの気持ちを私が語っても、それはどうしたって本物じゃないですよ」

「そんなの言われるまでもないです。でもあなたならなにかわかる

んでしょ。久坂が選んだ人だもの。あたしにはわからないことが、わかるんでしょ！」

そうじゃなきゃ許せない。

「私も、久坂さんの全部がわかるわけじゃないんですが」

「そんな人にあたしは負けたんですか。久坂のことなんてなんにも知らないくせに、取って行っただんですか」

折原さんは、目を伏しめがちにした。まつげが長いんだ。マスカラしてないのに。

「私は、理由を話してもらえない時は、相手に努力を放棄されたんだ、と受け止めます」

「……え？」

「理解しあうためのヒントをお互いに与え合うのが、話し合いや、ケンカだと思います。だから安芸さんは、今も、理由を知りたがっているんじゃないんですか」

気がつくと、目をまつすぐに見られていた。

「本当はそれに気づいているから、理由を求めているんじゃないんですか。久坂さんからの、一緒に続けるための努力を」

人に手を上げたのは、初めてだった。鈍い音がして、折原さんは頬をおさえていた。

「そんなことあなたに言われたくない！」

自分で聞いておいて、無茶苦茶だ。だけど荒げた声も一緒に折原さんにたたきつけて。

あたしはその場から逃げ出した。

一緒にい続けるための努力。

久坂はずっと謝るばかりで。

謝って欲しかったんじゃないの。

怒ってもいい。叱ってもいい。罵ってくれても。

あたし達を終わりにしないための言葉を、言ってほしかった。

その足でうちに逃げ帰った。電話で数ちゃんに泣きついた。そんなに仕事ほっぽりだしてあほかと怒鳴られたけど、ごもつともだと思っけどごもつともじゃない。

この恋は終わるんだろう。

他の人から見たら、とつくに終わってるんだろうし、普通のあたしにだってわかる。

だけど受け入れられない。受け入れることに時間があるの。そう思えただけ進歩なんだって、そう言って欲しいっていったら、仕事を終えた夜に駆けつけてくれた数ちゃんはやっぱり甘ったれんなつて言った。

それにしてもその折原って人、久坂君が選びそうな感じやな、なんていうから、またあたしは泣いて喚いてかんしゃくを起こした。あたし自身がわかっていないことを、まっすぐに言い当ててしまうのは、久坂そっくりだった。

それでも、この恋は終わるんだろう。

高校生の時から、ずっと好きだった。なくなるなんて思いもしなかった。思い出の全部が痛むのに、いつかなつかしく思い返せるときが来るの？

そらそうや、陽菜ちゃんのことやし、けろつとしていつか誰かの隣におさまつとるよ。面食いやから、イケメンはまちがいない。将来性もあるやろ、伯父さんのこともあるし。

そんな言葉は全然うれしくなかったけど、そのあとの言葉はうれしかった。

だから、前も言ったけど、今は好きなように泣き。人によってやり方あるよってな、陽菜ちゃんはそうやって仕舞いをつけていく子なんやろう。

綺麗な子じゃなくてごめん。久坂に、たたいちゃった折原さんに、嘘ついちゃったお父さんと伯父さんとお母さんに、当り散らしてる

数ちゃんに、前は好きだった自分に、謝って、あたしは大声で泣いた。

(後書き)

ずっと安芸をちゃんと失恋させてあげたかったです、という話でした。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5635y/>

あめおんな番外編：安芸の失恋

2011年11月16日22時10分発行